

ポストヒューマンの時代が迫ってきた

東京都立晴海総合高等学校
キャリアカウンセラー

千葉吉裕

2014年6月5日、ソフトバンクモバイル株式会社は、フランスのALDEBARAN Robotics SASと共同で開発した世界初の感情認識パーソナルロボット「Pepper」を発表しました。表情と声から人の感情を推定する感情認識機能を搭載し、その人の感情に適した反応ができるそうです。さらに、クラウド上のデータベースにロボットの経験が蓄積され、多くの情報を人工知能によって分析、感情への対応の仕方を学習し、ロボットが成長していく仕組みになっているということです。ロボット技術は著しいスピードで進歩しており、今後、ロボットの進歩に、大いに関心がもたれます。

その進歩を予測している人がいます。米国グーグル社のエンジニア部門レイ・カーツワイル氏です。彼は、技術開発の歴史や生物の進化をもとに未来を推測しています。過去の革新的な出来事が起こった時期から、指数的に進歩する事実を見だし、2045年に、人工知能が、人間の知能を超えると言っています。すでに情報を記憶することは、人間はコンピュータにありません。

とかく、新しい技術の導入はいつの時代も批判の対象でした。テレビが普及した時代も、テレビは「健康に悪い」「バカになる」等と批判にさらされ、ワープロが普及すれば、「漢字を覚えなくなった」と言われました。古く遡れば、古代ギリシアにおいても、「文

字を使えば知恵は高まる」という考えに對して、「文字は記憶することを怠るようになり、人々に害を及ぼす」と文字の活用が批判されました。

インターネットが記憶を妨げるという批判は、古代ギリシア時代と変わらず、同じことが繰り返されていることに気づかされます。新しい技術に対する不安、変化への怖れは人間の根源的な反応なのかもしれません。しかし、道具の発明、普及が社会を進展させ、人類の知恵を高めていることを見落としてはいけません。また、新しい技術に對応するための能力育成も視野に入れる必要があるでしょう。

カリフォルニア大学バークレー校の調査によれば、人類が2000年までに30万年かけて蓄積した情報量は12EB（エクサバイト…1エクサバイトは1GBの10億倍）で、01年から03年に新たに蓄積された情報量に匹敵するそうです。この調査から10年以上経ち、情報技術の進展により、今や数カ月で30万年分の情報量が蓄積される時代になつてしまいました。

情報が爆発的に増加し、技術が進展するポストヒューマン時代が少しずつ近づいています。この変化を踏まえ、教育はどのように変わっていく必要があるのでしょうか。今までと同じ方法では対応はできません。入学試験などの能力評価も、変える必要があるでしょう。例えば、記憶している量を測るの

ではなく、知識を活用する力として、思考、判断する力を測らなければならぬでしょう。機械にはまだできない創造性の評価も重要になってくるでしょう。

高度情報化社会に對応するためには、義務教育の中で知識のマップを子どもたちの頭に整えることが大切だと思います。大量に出現する新たな知識の意味づけを素早く適切に行うための下地になるマップです。新たな知識を得るためには、わからないことがあつたら、すぐに調べる習慣を備えておかなければなりません。そのためには好奇心を高め、意欲・関心を喚起する必要があります。

つまり、主体的に積極的に学ぶ態度を育成することが重要になってきています。調べるためには、「検索する能力」が求められます。必要な情報を効率よく見つけ出すのは容易なことではありません。どういふ単語を打ち込めばいいのか、連想する力を身につけなければなりません。目的の単語を入力検索し、ヒットした情報が得た情報とは限りませんから、検索が上手か下手かで、備えている知識の質に差が出てしまいます。

予測される変化のスピードはとても速く、古きを消し去り、新たな状態に入れ替わってしまうと表現されているほどです。迫り来る新たな状況に對応すべく対策を準備されてはいいかがでしょうか。